

「なんか」による話題開始についての一考察

若松史恵(一橋大学大学院生)

1. はじめに

話題転換に関する研究において、話題の開始部に用いられる言語的要素についての研究は多く行われているが、なぜそのような言語的要素が用いられているのかについては、まだ十分に明らかになっていない。若松 (2018) は、日本語母語話者と学習者の話題開始に用いられる言語的要素を量的手法を用いて検討し、「なんか」について、母語話者は話題開始部に出現しやすいのに対し、学習者は話題開始部には出現していないことを明らかにしている。本研究では、会話の中で母語話者の発話冒頭に「なんか」が用いられている発話（以下、ターゲット発話）とその前接発話の関係を分析し、話題開始部と開始部以外を比較することにより、「なんか」が話題の展開にどのような役割を果たしているかを明らかにする。

2. 先行研究

田窪・金水 (1997) は「なんか」はつなぎの言葉 (filler) であり、「だいたいこんな感じ」という「心的状態」に対応する形式になっていると指摘している。「なんか」は filler として発話を和らげる (Maynard, 1989)、躊躇や不確かさを表す (杉崎, 2017) などの機能を持つことが指摘されている一方、鈴木 (2000) は発話権の獲得を指摘し、発話の最初の「なんか」には新しい話題の導入を示す機能が付属することがあるとしている。また、田中 (2018) は話題開始のための談話標識としての「なんか」について談話内容に対する話し手の態度を表すとしているが、具体的な検討は見られない。

このように、なんかは躊躇や不確かさ、和らげを表すという指摘がされる一方、話題を開始する機能も指摘されている。新しい話題をどのように示して導入していくかは、話し手にとって重要である。しかし、先行研究はいずれも「なんか」が用いられる発話について検討するにとどまっており、「なんか」が話題の展開に果たす役割はまだ明らかになっていないといえる。

3. 分析方法

本研究では話題の開始に用いられる「なんか」の特徴を明らかにするために、発話の冒頭に「なんか」が用いられる発話をターゲット発話として分析の対象とする¹。また、ターゲット発話の直前の発話を前接発話とする。さらに、前接発話とターゲット発話の関係を分析するために発話領域という概念を用いる。李 (2014) は初対面会話の話題転換を分析する手法として、話題を自分だけが情報提供のできる「自分話題」、相手だけが情報提供のできる「相手話題」、自分と相手が情報を共有する「共通話題」に分けている。本研究ではターゲット発話や前接発話について、発話を単位として話者のどちらかが情報提供できるかに分けて分析するため、李 (2014) を参考に新たに発話領域という概念を定義して分析に用いた。

分析の手順は、まず分析 1 として、ターゲット発話の発話領域を分析した。次に分析 2 として、ターゲット発話の発話領域とその前接発話の発話領域の関係を分析して、話題開始部と開始部以外を比較した。

3.1 話題の認定方法

本研究では「BTSJ による日本語話し言葉コーパス」の初対面二国会話 6 資料を用いた。会話参加者はいずれも 20 代女性、学生の日本語母語話者であり、会話開始から 14 分間を分析の対象とした²。話題の認定にあたり、一般の日本語母語話者 9 名に対し話題境界調査 (若松, 2018) を実施した。そして、5 名以上が話題の切れ目であると指摘した箇所を話題境界と認定し、話題開始の最初の発話を話題開始部とした。その結果、会話全体の発話合計 4,039 のうち、94 が話題開始部と認定された。発話の単位は長い発話単位 (Japanese Discourse Research Initiative, 2017) を使用した。

¹ 「微妙になんか 学校まで遠くてなんか嫌なんですよ」のように発話の途中に「なんか」が用いられる発話は本研究の分析に含めない。

² 一番早く会話終了のタイマーが鳴ったペアに合わせ、すべての会話資料について、タイマーが鳴る前までの 14 分間を分析対象とした。

3.2 発話領域

本研究では、ターゲット発話の話者を「自分」、その対話相手を「相手」とし、発話内容がどちらの領域に属するかを発話領域を用いて分析する。「自分」と「相手」の関係は、会話参加者のどちらがターゲット発話の話者になるかにより相対的に変化する。以下に発話領域の定義と例を示す。⇒はターゲット発話を、→は前接発話を表す（以下、同様）。

自分領域：「自分」だけが情報提供のできる内容を持つ発話。「相手」からの問いかけに対する応答も含む。

相手領域：「相手」だけが情報提供のできる内容を持つ発話。「相手」への問いかけも含む。

共通領域：「自分」と「相手」が情報を共有する内容のみを持つ発話。

その他：途中で中断された発話やあいづち的発話など、いずれの領域にも属さない発話

(1) 話題「英語」

01	J2	[英語について] もう 単語量なんて受験の時の半分以下かな	
02		半分はそうか さすがに	
→ 03		でも（そう）受験の時に覚えたのは ほとんど抜けちゃったなって言う（そう）	相手領域
		感じかな	
⇒ 04	J1	なんか浅く詰め込んだものは（うん）見たことはあるんだけど	自分領域
05	J2	うん	

(2) 話題「横浜」

→ 01	J3	[横浜そごうについて] そごう の中で一番売り上げがあるらしいです	自分領域
02	J1	あ	その他
03		そうなんですか	その他
⇒ 04	J3	なんか 横浜の人はたぶん皆 そごうに行くんですよ	自分領域
05		〈笑い〉	
06	J1	へー	

断片 (1) はターゲット発話 04 の話者 J1 が「自分」となる。ターゲット発話で J1 は英単語について「浅く詰め込んだものは見たことある」と自身について語っているため、「自分領域」とした。また、前接発話 03 では J2 がやはり英単語について「受験の時に覚えたのはほとんど抜けた」と自身について語っているため、「相手領域」とした。

断片 (2) はターゲット発話 04 の話者 J3 が「自分」となる。04 の直前の 02, 03 はあいづちと考えられるため、前接発話は 01 とした。本研究ではターゲット発話の直前の発話を前接発話に認定したが、前接発話が相手の発話の繰り返しや「そうなんですか」「へー」「すごい」などのあいづち的発話である場合には、それらの発話を「その他」に分類し、その前の実質的内容を持つ発話を前接発話とした。ターゲット発話では J3 が横浜のデパートについて「横浜の人はそごうに行く」と自身の考えを語っているため「自分領域」とした。また前接発話でも J3 が「[横浜そごうは]一番売り上げがある」と自身の知る情報を語っているため「自分領域」とした。

また、本研究のターゲット発話の中には、「なんか」と発話した直後発話が中断されそのまま相手にターンが移ってしまうケースが見られた。このように途中で中断された発話は発話領域の判断が困難であると考え「その他」とした。「その他」は分析対象から除いた。

4. 分析結果

4.1 分析 1 の結果

会話全体のターゲット発話の出現数は 150 であり、そのうち話題開始部で出現したものは 11、開始部以外で出現したものは 139 であった。さらに発話領域を分析すると、このうち開始部以外で「その他」となったものが 15 あったため分析の対象から除いた³。この結果、話題開始部 11、開始部以外 124 を分析の対象とする。分析 1 では、ターゲット発話の発話領域について、話題開始部と開始部以外に分けて集計した。

³ 「その他」となったものは、「なんか」と発話した直後発話が中断され、そのまま相手にターンが移ってしまうケースが 14、あいづちとして用いられているケースが 1 であった。

表1 ターゲット発話の発話領域

	自分領域	相手領域	共通領域	合計	(その他)
話題開始部	11	0	0	11	(0)
開始部以外	115	9	0	124	(15)

表1から、ターゲット発話の発話領域は、話題開始部では全てが、開始部以外でもそのほとんどが「自分領域」に集中していることがわかった。このことから、開始部に限らず、開始部以外においても、「なんか」に続く発話では、相手の知らない、自分だけが語ることのできる内容が語られる傾向があるといえるだろう。内田(2001)は前置き表現の「なんか」について、聞き手にとっての新情報を後ろに伴うことを指摘しているが、本研究のデータからも同様の結果が得られたといえる。分析2では、ターゲット発話の発話領域とその前接発話の発話領域の間の関係を分析することにより、話題開始部で「なんか」が用いられる理由を探る。

4.2 分析2の結果

分析1の結果ターゲット発話の発話領域は「自分領域」に集中していることがわかった。分析2ではターゲット発話と前接発話の間の発話領域の変化に注目して、「なんか」が会話の流れの中でどのように用いられているかを明らかにする。

表2 前接発話とターゲット発話の発話領域の変化

	領域変化あり	領域変化なし	合計
話題開始部	9	2	11
開始部以外	30	94	124

表2は前接発話とターゲット発話の間に発話領域の変化が見られたか否かを、話題開始部と開始部以外に分けて集計したものである。カイ二乗検定の結果、 $\chi^2(1)=13.647$, $P<.01$ と有意差がみられた。残差分析の結果、話題開始部では「領域変化あり」が、開始部以外では「領域変化なし」が多いという結果が得られた($P<.01$)。

ここで、有意差が見られたものについてその特徴を明らかにするため、話題開始部の「領域変化あり」と開始部以外の「領域変化なし」について検討しよう。話題開始部の「領域変化あり」は次の断片(3)、開始部以外の「領域変化なし」は前掲の断片(2)となる。まず、開始部の「領域変化あり」の例として断片(3)を検討する。

(3) 話題「花火」—「広島焼」 横線は話題境界を表す

01	J1	で 私は覚えてないんですけど	
02		なんか騒いで花火どころじゃなかったっていう なんか私が怖がって (あー) その話しかされないんで<笑い> (<笑い>) 尾道っていうと“怖い花火があるんだー”とか<笑い>そういう風に思っちゃって (あー) 行くことないんですね	
03	J3	ああ	
04	J1	うん	
→	05	でも うん 結構行った人はいって (あーあー) ゆってますね	相手領域
⇒	06	J3 なんか 広島 広島市内も行ってみないですよ	自分領域
07	J1	うん	

断片(3)はターゲット発話06の話者J3が「自分」となり、05が前接発話となる。06でJ3は「なんか広島市内も行ってみない」とJ3自身の考えについて語り、後続話題が導入されている。06はJ3自身の希望について語っているため「自分領域」とした。また、前接発話である05は「[尾道に] 行った人はいって言う」というJ1が実際に尾道の良さを聞いたというエピソードであるため、「相手領域」とした。この断片の前にJ1は広島出身であることが語られている。J1の出身地は尾道から近く、またJ3が尾道を旅行したことから、尾道についての話題が続いている。01から05まではJ1の尾道での花火大会のエピソードが語られており、その間J3は「ああ」とあいづちを挟むのみで、発話権を取得しようとはしていない。その後ターゲット発話でJ3は尾道の話題から離れ、広島市内に行きたいと語っている。尾道と広島市内は一見関連性がないように見えるが、J1の出身地「広島」というキーワードに関連している。前接発話は尾道自体の評価について語られていたが、ターゲット発話ではそこで話題となっている尾道に関連させつつも、広島市内という新しい話題に志向し後続話題が導入される様子が見受けられた。そこには、尾道をJ1の出身地「広島」に結びつけ、さらにそ

こに広島市内を関連付けることにより、「尾道」から「広島市内」へと、光を当てる側面を変えるように異なる切り口から後続話題を導入していく様子が見受けられる。

断片 (3) では前接発話からターゲット発話へ関連した話題へと変化させつつ、相手の領域から自分の領域へと会話の流れを引き寄せている様子が見られた。話題開始部で領域が変化したターゲット発話を検討するといずれも「相手領域」の語りの後「なんか」を用いて自分の経験、考え、エピソードなどを語って後続話題が導入されている。その際ターゲット発話では前接発話に関連させつつも異なる切り口から自身のことを語り始める様子が観察された。

次に、開始部以外の「領域変化なし」の例として前掲の断片 (2) を検討する。ターゲット発話では「横浜の人はそごうに行く」という内容が語られており、これは前接発話「そごうの中で一番売り上げがある」の内容を裏付ける内容となっており、「そごう」について同じ側面から話題を継続している。開始部以外で領域が変化していないターゲット発話を検討すると、断片 (2) のようなケースの他にも、質問に対する応答の冒頭に「なんか」が用いられているケースが見受けられた。いずれも前接発話からターゲット発話にかけて、異なる切り口から会話を展開する様子は見受けられなかった。

5. 考察

分析の結果、ターゲット発話はそのほとんどが「自分領域」の発話であること、話題開始部では、そのほとんどに「相手領域」から「自分領域」への領域の変化が見られたのに対し、開始部以外では、領域が変化しない傾向があることがわかった。さらに、「なんか」による話題開始には、前接発話で話題となっているものに関連させてターゲット発話が組み立てられつつも、前接発話とターゲット発話の間には話題となっているものに対する切り口の変化が見られた。このことから、話題開始部では、前接発話の「相手領域」の発話に対して、「なんか」を用いて、自分の経験、考え、エピソードなどを語り、今までの話題と関連させつつも異なる切り口から話題を導入することで、話者が会話の流れを相手の領域から自分の領域へと引き寄せていることがうかがえる。「なんか」に関する先行研究では、和らげ (Maynard, 1989)、躊躇や不確かさ (杉崎, 2017) など、「なんか」の示す不確かさ、曖昧さについての指摘が見られるが、その一方、新しい話題の導入を示す機能 (鈴木, 2000) も指摘されている。話題開始部において新しい話題をどのように示して導入していくかは、話し手にとって重要である。自らの発話により「相手領域」から「自分領域」へと話題を変化させることには慎重さが必要とされるであろう。そのため、話題の開始にあたり「なんか」を用いることで、自身の発話を和らげたり、曖昧さを示している可能性が考えられる。「なんか」はこのような話者の態度を示しながらも、相手の領域から自分の領域へと会話の流れを引き寄せて、自ら話題を開始する戦略として用いられている可能性が示唆された。

文字化の記号 文字化の記号は、「基本的な文字化の原則」に従った。本研究で主に使用した記号は以下のとおりである。

<>{ } : 重ねられた発話 < >{ } : 重ねた発話 () : 短いあいづち [] : 文脈情報

6. 参考文献

- Japanese Discourse Research Initiative (2017). 発話単位ラベリングマニュアル version2.1
- Maynard, Senko (1989). Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management, Norwood: Ablex.
- 李珂南 (2014). 日中大学生接触場面の初対面会話における話題転換—「ラポールマネジメント」の視点から— 日本語教育, 157, 17-31
- 杉崎美生 (2017). 自己開示場面における「なんか」の即興性. 日本女子大学大学院文学研究科紀要, 24, 81-92
- 鈴木佳奈 (2000). 会話における「なんか」の機能に関する一考察 大阪大学言語文化学, 9, 63-78
- 田窪行則・金水敏 (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能 音声文法研究会(編) 文法と音声 くろしお出版 pp. 257-279
- 田中奈緒美 (2018). 談話理解の視点から見た話題開始のための談話標識の分類 日本語教育, 170, 130-137
- 内田らら (2001). 会話に見られる「なんか」と文法化:「前置き表現」の「なんか」は単なる口ぐせか? 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編, 24(2), 1-9
- 若松史恵 (2018). 話題境界に出現する言語的要素についての考察—話題開始部に着目して— 2018 年度日本語教育学会秋季大会予稿集, 208-213

使用コーパス

宇佐美まゆみ監修 BTSJ による日本語話し言葉コーパス (2011 年版)